# 命を守る贈り物

仲田 茜（神奈川県）

35歳を過ぎたころから、私の誕生日はがらりと実務的になった。
かつてはケーキやプレゼントでにぎわっていた日なのに、今では母から届くのは「今年の人間ドック代、振り込んだよ」という一行の連絡だけ。
リボンのついた箱の代わりに、健康診断書が主役を張るようになった。
そうなった理由は、聞くまでもない。
母は長く持病とつき合い、父は人間ドックのおかげでがんを早期に見つけてもらった。以来、我が家では検査が“お守り”のような位置づけになったのだ。
とはいえ、当の私はどこか乗り気ではなかった。

「まだ若いし」「症状もないし」。根拠のない自信に寄りかかりながら、毎年欠かさず送られてくる“誕生日ミッション”に、小さくため息をもらした。
しかもこの贈り物には、受診日の報告と結果の提出という「任務完了報告」までセットでついてくる。ありがたいようで、どこか後見人つきの誕生日だ。

1年目、2年目は異常なし。
「ほら、やっぱりね」と、胸の奥でひそかに勝ち誇った私を、両親は「何もないと確かめるための検査なのよ」とあっさりたしなめた。言い分は正しい。だが、それで足取りが軽くなるわけではない。
そんな油断を見透かすように、3年目で異変が見つかった。
子宮頸がんだった。
「まさか自分が」。
その言葉だけが、空洞になった胸の内で何度も反響した。

原因を探すように過去をほじくり返し、自分を責めそうになったそのとき、担当医が静かに口を開いた。
「病気が、あなたを選んだわけではありません。誰にでも起こり得ることです。あなたの若い頃はワクチンもまだ普及していなかった。早く見つけられたことを、むしろ誇りに思ってください」
その一言で、胸の奥に固まっていたものがすっとほどけていった。
手術は無事に終わり、私も両親もようやく深く息をつけた。
それから私は、自分の身体の小さな変化にも、以前より丁寧に耳を澄ますようになった。
生理痛や冷えを「よくあること」と片づけず、漢方薬を飲んだり、温活グッズを試したり、軽い運動を日々の習慣にした。整えるという行為は、思っていた以上に心を安定させた。
ただ、日本では子宮頸がんの話題は、いまだ声をひそめがちだ。
性行為で感染するという一点だけで、話題に陰が差す。

でも病気は、恥でも秘密でもない。
自分が向き合ったからこそ、その空気の重さにも気づいた。
妹には十二歳の娘がいる。
私が経験した分、伝えられることは伝えたいと思った。
「性のことを、きちんと話してあげて。ワクチンに抵抗がないなら、接種も考えてほしいの。
――それからね、将来はあの子にも人間ドック代を誕生日にプレゼントしたいんだ」
そう言うと、妹は迷いなくうなずいた。

両親から私へ受け継がれた“守るための贈り物”を、今度は私が姪へ手渡す番だ。
健康というバトンが世代をまたいで続いていくなら、それはきっと、ささやかだけれど確かな愛の形だと思う。
面倒だと感じた年もあったけれど、今ならはっきり言える。
人間ドックを受けてよかった。
あれは、命を守る贈り物だったのだ。